

# 音 合 の 町 崎 黒

## 新聞からたどる黒崎の歴史 (六十七)

ものすごい川の流に、網は綱のようになり、ひっぱっているのがやつとだった。

(先月号からの続き)

玉橋を渡り境内の端から、細い四角のろくの悪い(不安定)橋を渡ると、狭い田んぼ道を歩いて大野小のグラウンドからすだれやの裏の船着場に着いた。船に網を積み込むと船のとも(後尾)に設けられたまい(流し)かきが船を漕いだり網をまいたりする場所で薬でちぐらのようなものが作られていた)の中に座ると「チャボツ、チャボツ」と船を漕いで少しのぼり、昔の斉藤校長さんのこうろ(う)ばた(昔、川で洗った場所)のあたりから流れたゆるい対岸塩俵側に移った。その日、下塩俵の北斉場の船着場に着いたのは午前二時半を少し回ったころだった。ろうか。暗い川面をすかして見たが、とうとうと流れる川音のみで、人影はなかった。

が、一人前に網をまけるようになるには並大抵ではなかった。暗闇の中、一人で船を漕いで網をまき終え、やれやれと思つたら、はるか遠くに行つてはいるはずのすてがすく船のそばにあってびつくりしたり、一枚一枚まいたはずの葉と網が広がらないでくっ付いているのを、まき終えるまで知らないでがっかりすることよくあった。

また、これは余談であるが、今思えば、人より小心者の筆者があつた。暗い、何が流れてくるかも知れない夜の川に、たつた一人でもよく漁に出られたものだと思ながら感心する。その日も網をまき終わり、手縄を持ってすかして見たら網は割合よく広がっているようだった。(北斉場はほとんどが一わまさ)塩俵の船着場から出る時、塩俵よりにまいた網は小沼の大野諏訪神社裏付近に来ると、ぐっと大野側により、それから少し下つたカブ付近(今の大野大橋)から今度は逆に鷺ノ木側に張り出して網は流れた。そのあた

りによく鮭がかかったのだが、それより少し下流にあつた下鷺ノ木の仲吉ろん(河川改修により移転)の上手あたりまで何時も網を引きあげていた。運命のその日、網が少し鷺ノ木の岸側に寄り過ぎたかなと思ひながら、網をたぐり始めたら突然「グツ」ときた。

「瞬間「鮭かっ」と思つたが鮭の当たりではない。ものすごく強い引きだった。一体なんだろう。何に網がひつかつたのかと驚き、心配しながら網を引いたが逆に強い力で船ごと持つて行かれそうになつた。今の川の流れと違つて当時そのあたりは渦をまくようなすこい流れだった。はつと思ひ当たつたのは、仲吉ろんよりの川の中に昔のげんごみ橋(大野で初めての橋、明治二十一年(四十三三年)の杭が川底に残っているということ



だった。ものすごい川の流に網は一本の網のようになり、引っぱっているのがやつとで、川の流にさからい船が沈みそうになつた。船のともにおつかる水の音。水が入り船が沈もうとするその防衛に必死だった。(冷静に考えれば網は離せばよかつたのだが)

午前四時を少し回つたばかりのころだつた。どうするか、大声をあげてもまっ暗い川の中である。誰か助けてくれる人は居ないかと念じた、それは僅かな時間だつたか知れないが、自分にとつては、どんなに長い時間であつたか。その時幸運にも下塩俵の人が續けて二人程流してきたのである。「おういーとうした」というその声为天の助けに聞こえた。早速この人たちが網をかかりからはずしてくれ助けられたのだが、これが筆者の流しかき十数年の間で一番こわかつた思い出である。

また、こんなこともあつた。昭和二十二、三年ころのことである。あまり鮭もとれないくせによく大川(信濃川)まで流しに行つた。もちろん行きも帰りも櫂を漕いで、或る日、早めに夕飯を食べると少し風があるかなあと思ひながら大川へ下つた。案の定一匹もとれず、強くなつた風の中、櫂を漕ぎながら帰途についた。今は中ノ口川に入り大野の向かい側の島の端にたどりついたのは、午後十時を回

つた頃だった。夜に入つてからの強風で川はまるで海のように波立っていた。何時も大川から中ノ口川に入り、対岸の大野の灯を見てはつと、その日が、その日は大野の電気が全く見えず町は暗闇の中に沈んでいた。

注 終戦後間もないそのころ、極度に電力事情が悪く、時々節電といつて送電を停止され、ランプや、ロソクを使うことが多かつた。

今の流しのかきの人たちは、大きく頑丈なエンジン船で漁をするが、筆者の漁船は幅の狭い小さく不安定な木造船だつた。こんな船で、強風に波立つ暗闇の川を渡ることは、今思えば全く冒険なことだつた。大きな波を昔はのたと言つたが、波にゆられ船がひっくり返りそうになり、のたが「バシヤツ、バシヤツ」と船の中に入り、切ない時の神だのみ、必死で念じながら船を漕ぎ無事大野側に移ることができた。

前記の橋杭に網をかけて船が沈みそうになつたことや、この命がけのようなこわい体験をしながら、なお流しかきを續けたのは、父から手ほどきを受けて、初めての川で鮭をとつた思い出があるからだつた。あの大きな鮭がゆるやかに泳ぎながら引き寄せられてきて、それを船の中に引きあげる時のなんともいわれぬその感触が忘れられなかつたからである。

(続)

平成十一年八月一日発行(毎月一日発行)四一九号 発行/黒崎町役場 千九五〇一一九六 新潟県西蒲原郡黒崎町大野二八四三三 電話/〇二五三七三二〇一 編集/企画商工課 担当/広報統計係 印刷/小野塚印刷株式会社